

学苑 第八四五号 一〇二〇二一・三

浄土教略史(一)

——一遍研究への序章——

早田 啓子

はじめに

本稿の目的は「一遍上人の思想と生涯」という題目へ繋げるために、浄土思想の発生から伝搬までをインド、中国及び日本の経論に遡って整理したものである。「一遍上人の思想と生涯」をまとめるに当たって、三国伝来の浄土教の歴史を筆者なりに整理する必要があると判断したためである。従って本稿に続く拙稿「浄土教略史(二)」もこの目的に沿ったかたちでまとめる方法をとることを付記しておく。

第一章 浄土思想の歴史

第一節 「浄土」について

「浄土」の考え方は大乘仏教で生まれた。それは仏の国を指したものであるが、大乘仏教ではさまざまな仏が想定された。大乘仏教で生まれた多くの仏たちは、釈尊の投影に他ならないわけで、原始仏教思想が上座仏教を経て大乘仏教へと発展していく過程でさまざまな仏とその「浄土」が生まれてきたのである。

そもそも「浄土」という言葉は中国仏教の中で成立した言葉である。

曇鸞^{註1}や道綽^{註2}によって阿弥陀仏の「極楽」が「浄土」であるという解釈がなされた。しかしこの時代は極楽だけが「浄土」ではなかった。「浄土」には他にも弥勒仏の「弥勒浄土」^{註3}や阿閼仏の「東方妙喜浄土」^{註4}、薬師仏の「東方淨瑠璃世界」^{註5}などがあった。南北朝時代には「弥勒浄土」と「阿弥陀浄土」が混在しており、次の善導によって「浄土」と「極楽」が同一視されるようになる。この時、「浄土」は「阿弥陀仏」の世界を意味するようになった。

第二節 阿弥陀仏と浄土の起源

浄土思想を構成している要素として、阿弥陀仏と本願と極楽浄土の三つがある。法蔵菩薩^{註6}が本願を立てて修行し、阿弥陀仏となって極楽浄土に住して人々を救うという構造である。この三要素のうち、特に阿弥陀仏と極楽浄土の問題が古くから論じられてきた。その理由は、浄土思想がインドではなく別の地域で成立したとする考え方があるからである。

まず、阿弥陀仏の問題から考えてみよう。阿弥陀仏がインド以外の地域で成立したという考え方は近世ヨーロッパで起こった。即ち仏教の阿弥陀仏はインドではなくイランに起源をもつという考え方である。イランでは

ゾロアスター教^{註7}のアフラマズダーが阿弥陀仏のような無限の光をもつ神として存在していた。こういった思想が紀元前一世紀から紀元後三世紀のサカ・パルティア時代^{註8}及びクシャーン時代^{註9}にインドへ流れ込んできたとする考え方である。彼らは皆イラン系の言語を話す民族であった。現在パキスタンの西北のタキシラ^{註10}にあるジャンディアル遺跡は、筆者も調査をしたが拝火教寺院である。また、ヒンドウクシュ山脈の北側のスルフコタル遺跡からも拝火教寺院が発見されている。时期的には阿弥陀仏の思想が出てくる時期と重なる。また、漢訳では阿弥陀仏は「無量光仏」「無量寿仏」と訳されるがサンスクリット原典では、「無量光仏」に相当する言葉は *amītabhā* であり「無量寿仏」に相当する言葉は *amītyaśus* である。ヨーロッパではゾロアスター教との関係から「無限なる光」の概念が重視され、日本や中国では「無限なる時間」の観念が重視されてきたということになる。

これに対して、阿弥陀仏がインド内部で成立したとする考え方もある。藤田宏達博士は『原始浄土思想の研究』（岩波書店 一九七〇年）で原始経典を手掛かりとして、既に原始仏教の中にアミターバの観念が存在している。

外国起源説をどう捉えて考えたらよいであろうか。阿弥陀仏の思想が芽生えた頃、インド亜大陸は流動性に富んでその社会や文化や人々は、我々が今考えるよりも遥かにダイナミックに動いていたのではないだろうか。従って、文化や宗教の伝搬や混淆はより速やかに深く繋がり影響し合っていたのではないかと想像する。所謂小乗仏教の行き着いた時点から大乘仏教が勃興してくることを考えたとき、その思想としての必然性はやはり仏教の中から起こってきたとみるべきであろう。

次に阿弥陀仏と極楽浄土の問題について考えてみよう。阿弥陀仏と極楽浄土の考え方は別のところで生まれたと考えられている。まず、極楽の描写は『無量壽經』^{註11}や『阿彌陀經』^{註12}では「四季がなく、寒くも熱くもない」とか「天の音楽があり、天の花が雨降る」とまさに極楽の様子を描写している。また、その起源についてはゾロアスター教などの外来起源説、大善見王神話や仏塔の表現などの仏教内部説、梵天神話などのインド神話起源説などがある。極楽浄土の問題もやはり、阿弥陀仏の発生と同様にインド文化が周辺の文化を取り込んで大きく膨らんでいったと解釈するのが妥当であろう。

第三節 浄土経典について

インドや中央アジアから中国に紹介され、翻訳された数多くの教典のうち、浄土に生まれることを説く教典は相当の数に上る。則ち大乘、小乗合わせて九四〇部余りの教典が知られるうち、二七四部は何らかの意味で浄土に言及しているものである。

しかし、「浄土思想」には「浄土経」と名づけられた経典はない。それは「般若思想」や「華嚴思想」等にはその所依となる『般若経』や『華嚴経』等があるのとは違う。『無量壽經』や『觀無量壽經』^{註13}等が「浄土経典」と呼ばれるようになったのは、中国や日本に浄土教が興って後のことである。もっとも中国では多くの経論が浄土教の所依の経論として用いられた。『無量壽經』と『阿彌陀經』は、紀元一〇〇年頃クシャーン朝時代に北西インドにおいて成立したとみられている。インドから中央アジアを経由して中国、朝鮮半島、日本へ伝搬された。そしてこれらの二経にかなり遅れて『觀無量壽經』が成立し、これは中国、日本における浄土教の確立に決

定的な影響を及ぼした經典であった。

日本では法然による『無量壽經』『阿彌陀經』『觀無量壽經』の「浄土三部經」と『往生論』の「三經一論」をもって浄土教の所依の經論としたのである。ここでは「浄土三部經」について説明をしておきたいと思う。

『無量壽經』

(1) サンスクリット本

『無量壽經』のサンスクリット本 *Sukhāvatīyūha* (極樂の莊嚴) を紹介したのは、一八八三年、マックス・ミュラーと南条文雄でオックスフォード刊の共編本である。その他に大谷光瑞本(一九二九年)、荻原雲来改訂本(一九三二年)、ヴァイディア本(一九六一年)、足利惇氏本(一九六五年)の四本がある。これらはすべてネパールで発見された写本に基づいている。

(2) 漢訳

『無量壽經』の漢訳は十二訳があったといわれているが、現存するのは次の五訳だけである。

① 『阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經』呉・支謙訳

② 『無量清淨平等』四卷 後漢・支婁迦讖訳

③ 『無量壽經』二卷 曹魏・康僧鎧訳

④ 『無量壽如來會』二卷 唐・菩提流志訳

⑤ 『大乘無量壽莊嚴經』三卷 宋・法賢訳

このうち中国や日本で最も重視されたのは、③の『無量壽經』二卷 曹魏・康僧鎧訳である。

(3) チベット語訳

チベット大蔵經に『大寶積經』^{註14} 第五会として収められ「聖なるアミター

バの莊嚴と名づけられる大乘經」と呼ばれている。これは現存のサンスクリット本の經典名と異なっている。訳者はインド人のジナミトラ Jinamitra とダーナシーラ Dānaśīla 及びチベット人のイエシエデ Ye ses de の共訳と伝えられている。

(4) コータン語訳

『無量壽經』にコータン語訳があることは、最近まで知られていなかった。サンスクリット本からの翻訳の断片である。

(5) ウィグル語訳

『無量壽經』にウィグル語訳があるということも、最近わかったことである。ドイツ探検隊将来資料の中に七つの断片が確認されている。この中の六断片について康僧鎧訳の『無量壽經』の部分に比定されている。

(6) 西夏語訳

『無量壽經』に西夏語訳があるということも、最近判明したことである。西夏語『大寶積經』は漢訳の『大寶積經』から翻訳されたものといわれる。

『阿彌陀經』

(1) サンスクリット本

『阿彌陀經』のサンスクリット本も『無量壽經』の原名と同じく *Sukhāvatīyūha* という。平安時代初期に円仁が中国より将来したものと考えられるが、江戸時代後期に常明が『梵漢兩字阿彌陀經』として刊行した。その後、慈雲の『梵漢阿彌陀經』、法護の『梵文阿彌陀經諸譯互證』と『梵文阿彌陀經義釋』が刊行された。近年になってギメ美術館の手写本や阿満得寿本が出された。また、慈雲本や光覺本の影印本も出されている。

(2) 漢訳

『阿彌陀經』の漢訳は三訳あるといわれていたが、現存しているのは、『阿彌陀經』一卷 姚秦・鳩摩羅什^{註15}訳(四〇二年頃)と『稱讚淨土佛攝受經』一卷 唐・玄奘訳(六五〇年)の二訳である。これらのうち、羅什訳が広く流布しており玄奘訳よりもサンスクリット元本に近いといわれている。

(3) チベット語訳

『阿彌陀經』のチベット語訳は「聖なる極楽の莊嚴」と名づけられる大乘經 *Ārya-sukhāvatīyūha nāma mahāyānasūtra* という。訳者はインド人のダーナシーラとチベット人のイエシエデの共訳と伝えられている。近年の出版では一九五五年頃に出版された河口慧海本があり、これは『影印北京版・西藏大藏經』に収められている。

また、ペリオの敦煌出土の資料の中からチベット訳の異本が発見された。「アミターバ經」一卷という写本であるが、これは羅什訳からの重訳であることがわかった。

(4) ウィグル語訳

ウィグル語訳『阿彌陀經』はドイツ探検隊将来の資料の中に発見された一断片であるが、これは先の『無量壽經』のウィグル語訳の断片と共に同一の本に入っていたものと推定されている。

(5) 西夏語訳

西夏語訳『阿彌陀經』として『佛說阿彌陀經典』がある。この本は羅什訳『阿彌陀經』から翻訳されたと記されている。現在、レニングラード東方研究所に存在する。

『觀無量壽經』

『觀無量壽經』のサンスクリット本とチベット語訳本は現存していない。

(1) 漢訳

これは『觀無量壽佛經』とか『無量壽觀經』とも呼ばれている。宋代に晁良耶舍が建康にやってきて、鐘山の道林精舎で訳したといわれている。

『觀無量壽經』の漢訳本は晁良耶舍訳の一本しかない。

(2) ウィグル語訳

『觀無量壽經』のウィグル語訳として、一番古いものは大谷探検隊がトルファンで発見した断片である。これは晁良耶舍訳の漢訳からの翻訳であることがわかっている。また、ドイツ探検隊将来の資料の中に二つの貝葉の破片が発見されている。いずれもが晁良耶舍訳のある部分に相当する。

なお『觀無量壽經』にサンスクリット原本が存在しないという事実に関して、この經典のインド成立に対して否定的な見方が示されている。現時点では中央アジア成立説と中国成立説がある。

第四節 インドの浄土思想

浄土教がインド仏教思想から生まれたことは確かであろうが、それを釈尊が説いたかどうかとなると断定はむずかしい。インド人の祖先はインド亜大陸に暮らしていた原住民とアーリア人の混血民族であるが、彼らはヒマラヤ山脈の彼方に彼らの理想郷ウッタラ楽土があると想像していた。しかし、仏教でいうところの「浄土」というのは仏陀になるための場であり悟りを求める人々が住む場所を意味している。

その一つとして弥勒仏の浄土としての兜率天^{註16}がある。インド仏教の宇宙観では須弥山^{註17}(ヒマラヤ山)を中心として地上世界が四方にあり、須弥山

に重なって天上界があると考えた。天上界は天人が住み楽しみに満ちた世界であるが、仏教では輪廻転生の世界のひとつと考えられていた。兜率天は仏陀が地上に生まれて教化する前に暮らしていた世界で、仏陀は摩耶夫人の胎内を借りて誕生した。

初期仏教や小乗仏教では一度に一人の仏しか現れない。釈尊の後を継いで出現する仏は弥勒仏であると考えた。弥勒仏もまた兜率天で暮らしていた。人々のこのような弥勒仏に対する信仰は、自分の終命の時に兜率天に生まれるという信仰を生んだ。このような兜率天に対する信仰は古くから行なわれ、大乘仏教の中にも取り入れられて盛んになった。

「浄土三部経」のうち、最初に成立したものは『無量壽経』と『阿彌陀經』である。『無量壽経』は五存七欠といわれ、全部で十二回訳出されたといわれ、現在用いられているものは康僧鎧訳（魏訳）の『無量壽経』である。その原型は、世紀前後の成立とみられている。インド大乘仏教の基盤を確立した人物は龍樹^{註18}で、この頃には阿彌陀仏の誓いを二十四願とする初期の『無量壽経』は成立していたとみられる。後期の『無量壽経』は唯識説の大成者である世親^{註19}の頃には既に流行していたといわれる。『無量壽経』では阿彌陀仏の四十八願と阿彌陀仏の清浄について述べている。極楽が清浄な国であることを明確にしているのは『觀無量壽経』である。「浄土三部経」のうち、『無量壽経』と『阿彌陀經』には梵本が存在しているが、『觀無量壽経』には存在しないことを考えると中国成立説もある。

ここで「浄土三部経」の内容について簡単に触れておく。成立順にまず『無量壽経』について述べる。この經典のポイントは阿彌陀仏が法蔵菩薩であった時に、四十八の願を立てる。順に修行を行なって願を成就させて阿彌陀仏となって西方極樂浄土を建設する、ということである。特に重要

な願は第十七願から第二十願までで、これらの願は阿彌陀仏の救いに関わるものである。則ち第十七願は、法蔵が阿彌陀仏となったことを「我が名を称する」という形で実証することを誓ったものである。以下に示す第十八願から第二十願までは、どのような方法で浄土に生まれるかを説いている。ここで大事なことは、念仏によって往生することと臨終来迎が語られていることである。

設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不取正覺唯除五逆誹謗
正法

設我得佛十方衆生發菩提心修諸功德至心發願欲生我國臨壽終時假令不與大衆
圍繞現其人前者不取正覺

設我得佛十方衆生聞我名號係念我國殖諸德本至心迴向欲生我國不果遂者不取
正覺^{註20}

次に『阿彌陀經』について述べる。この經典は『無量壽経』より少し遅れて成立したと考えられている。浄土やその国の人々の様子が語られ、念仏による往生さらに諸仏による阿彌陀仏の功德を讃えるなどの表現は『無量壽経』とほぼ同じような内容である。『阿彌陀經』には「浄土」という言葉はみられない。ここでは「極樂」について苦がなく楽のみがあり美しい蓮池や宝樹があり感覚的に美しい世界として描かれている。

最後に『觀無量壽経』について述べる。この經典は阿彌陀仏の十六の觀想が中心となっている。これらについて以下に記す。

一、日想觀Ⅱ『觀無量壽経』に説く觀法中の第一。太陽が西に沈むのを見て、極樂浄土が西にあると觀ずること。

二、水想觀Ⅱ『觀無量壽経』に説く觀法中の第二。浄土の大地を觀想

する方便として行なう観方。

三、地想観 〓 『觀無量壽經』に説く観法中の第三。第二の水想観を明了ならしめ、浄土の瑠璃地を観想すること。

四、宝樹観 〓 『觀無量壽經』に説く観法中の第四。浄土の宝樹の相を観想すること。

五、宝池観 〓 『觀無量壽經』に説く観法中の第五。極楽の八功德池の相を観想すること。

六、宝楼観 〓 『觀無量壽經』に説く観法中の第六。極楽の宝楼珠閣の相を観想すること。

七、華座観 〓 『觀無量壽經』に説く観法中の第七。阿弥陀仏の華座の相を観想すること。

八、像観 〓 『觀無量壽經』に説く観法中の第八。像想観の略。阿弥陀・観音・勢至の真身を観ずる方便として、宝像を観想すること。

九、真身観 〓 『觀無量壽經』に説く観法中の第九。高さ六十万億那由他恒河沙由旬の仏身を観想すること。

十、観音観 〓 『觀無量壽經』に説く観法中の第十。観音浄土における観音菩薩の身相を心に観想すること。

十一、勢至観 〓 『觀無量壽經』に説く観法中の第十一。勢至菩薩の身相を観想すること。

十二、普観 〓 『觀無量壽經』に説く観法中の第十二。普く極楽世界の依正二報の莊嚴を観想すること。

十三、雑想観 〓 『觀無量壽經』に説く観法中の第十三。阿弥陀・観音・勢至の三尊が種々に変現する雑相を観想すること。

十四、上輩観 〓 『觀無量壽經』に説く観法中の第十四。大乘の善根を修する凡夫が浄土に往生する相を観想すること。

十五、中輩観 〓 『觀無量壽經』に説く観法中の第十五。小乗及び世間の善根を修する凡夫が浄土に往生する相を観想すること。

十六、下輩観 〓 『觀無量壽經』に説く観法中の第十六。三輩観の一つ。下三品を観想すること。

このうち中心となるのは、第八の像観と第九の真身観である。第八の像観では以下のように説かれている。

佛告阿難及韋提希見此事已次當想佛所以者何諸佛如來是法界身遍入一切衆生心想中是故汝等心想佛時是心即是三十二相八十隨形好是心作佛是心是佛^{註21}

第九の真身観では、以下のように説かれている。

佛告阿難及韋提希此想成已次當更觀無量壽佛身相光明阿難當知無量壽佛身如百千萬億夜摩天閻浮檀金色佛身高六十萬億那由他恒河沙由旬眉間白毫右旋宛轉如五須彌山佛眼清淨如四大海水清白分明^{註22}

このように仏の姿を詳細に観想することが述べられている。第十四観から第十六観までは、観想とは捉えず浄土に生まれる人の九つの上中下の能力や資質の違いの説明とみることができる。

第五節 中国の浄土思想

中国における浄土思想は、浄土経論の訳出から始まる。現在、浄土思想に言及する漢訳経論は二九〇部ほどあるといわれている。その主なものを少し挙げてみる。善導^{註23}とほぼ同時代の七世紀の迦才^{註24}は『浄土論』の中で、

『無量壽經』『觀經』『阿彌陀經』『鼓音聲王經』『稱揚諸佛功德經』『發覺淨心經』『大集經』『十方往生經』『藥師經』『般舟經』『大阿彌陀經』『無量清淨覺經』の十二の經典、及び『往生論』『起信論』『十住毘婆娑論』『彌陀偈』『寶性論』『龍樹十二禮』『攝大乘論』の七つの論書を挙げている。また、善導の弟子懷感^{註25}は『釋淨土群疑論』の中で念仏三昧の根拠となる經論として、『華嚴經』^{註26}『涅槃經』^{註27}『觀佛三昧經』^{註28}『賢護』『般舟三昧經』『觀經』『鼓音聲王經』『大集月藏分』『地藏十輪經』『占察經』『文殊般若』『花首經』『大智度論』^{註29}を挙げている。

中国における淨土經論はこのように多くの經論を挙げてそのどれをも正依としていることがその特色であり、日本のように少なく絞り込んでいない。さらに陀羅尼^{註30}の読誦も行なっていたことも日本とは異なっている。また、これらの中には淨土思想に全く言及していない經典類も存在する。それらを淨土經論として取り上げたことは、ここに中国独自の淨土思想が存在することになる。例えば、宗曉は『文殊般若經』に説かれる「専称仏名」という文言を「西方阿彌陀仏に向かつて修し、専ら阿彌陀仏を称える」と解釈して『文殊般若經』を有力な淨土經典と査定する。このことは「専称仏名」と「阿彌陀仏」とを会通させて後世へ大きな影響を与えていくことになる。また、中国では多くの偽經が書かれたことも特色である。

では次に、訳出された主な經典を挙げてみよう。最初の訳出は支婁迦讖^{註31}による『般舟三昧經』である。ここに説かれる阿彌陀仏への見仏三昧を廬山の慧遠^{註32}が「白蓮社」で行なうことによって中国淨土教が成立した。『無量壽經』二巻は康僧鎧^{註33}訳といわれている。中国淨土教で大きな意味をもつといわれているのは、曇良耶舎訳の『觀無量壽經』である。善導はこれをもとに『觀無量壽經疏』四巻を著している。これを承けて日本では法然が

「偏に善導一師に依る」といい、親鸞は「善導独り仏の正意を明せり」といって日本の淨土教へ大変大きい影響を与えた。さらに『阿彌陀經』は鳩摩羅什の訳である。この經典は多くは読誦や写經に用いられた。

廬山の慧遠によって行なわれた念仏結社「白蓮社」を倣って中国ではその後、多くの念仏結社が結成されたが、宗曉は『樂邦分類』の中でその系譜を慧遠―善導―法照―少康―省常―宗頤とした。

中国では観念念仏をとった慧遠を祖師とし、二祖善導は称名念仏をとっている。慧遠の念仏思想について中国では観念も称名も同じ念仏であると考えられていたが、日本では両者は区別して理解されていた。日本では法然^{註34}が、『選択本願念佛集』の中でその系譜を曇鸞―道綽―善導―懷想―少康とし、親鸞は曇鸞―道綽―善導とした。これは慧遠が観想念仏をとり、善導が称名念仏を考えていたと理解されたからである。

慧遠の「白蓮社」は『般舟三昧經』に拠る念仏結社で、それは選ばれた賢人の宗教であり絶対他力本願の救済を目指す淨土教ではなかった。この念仏三昧は「般舟三昧」によって阿彌陀仏を見ることを目的としていた。「一心に西方阿彌陀仏を念ずること一昼夜、もしくは七日夜、七日を過ぎて以後、阿彌陀仏を見る」と『般舟三昧經』に説かれている。^{註35}

慧遠の淨土教は『般舟三昧經』に説く念仏三昧によって阿彌陀仏を見ることであり、口称ではなく観想念仏に拠って見仏し悟ることであった。

「般舟三昧」の行法に大きな功績を残したのは天台智顗^{註36}である。彼は天台の觀法の三昧を四種に分けて四種三昧^{註37}とした。その中の「常坐三昧」と「常行三昧」は後の淨土教に大きな影響を与えた。「常坐三昧」の「専ら一仏の名字を称える」行法を阿彌陀仏への専称念仏と解釈し、「常行三昧」については「七日夜」の念仏が「九十日の常行」と解釈している。さら

に慧遠の念仏は観想であったが智顗は「口に常に阿弥陀仏を称え」「心に常に阿弥陀仏を念ずる」と解釈した。また「常行三昧」について慧遠は「念仏三昧」による「見仏」であったが、智顗は「心が仏となる」ことであった。智顗の解釈は『般舟三昧經』に拠りながら『觀經』に、より近い解釈をとっている点が特徴的である。

『觀經』における浄土教の特徴は、持戒、念仏、誦經、写經、造像などの諸行を行ずるところである。

最後に日本浄土教に大きな、殆ど決定的というほどの影響を与えた善導について述べることにする。中国浄土教において善導は第二祖ということになっているが、慧遠の『般舟三昧經』による「見仏三昧」から智顗の「常行三昧」へと繋がり、法照の口称念仏の浄土往生行法へ転化している。

善導の「般舟三昧行法」は『觀經』による阿弥陀仏への七日、或いは九十日の「口称念仏」の浄土往生行法であり慧日、法照と同じものである。

善導の意図するところは、『觀經』から聖道門的な観仏の要素よりも一切衆生の救いを念頭に置いて「口称念仏」を選びとったことである。そしてこれが、浄土教の舵を大きくきることになったのであった。善導による『觀經』のこのような解釈は、彼の並々ならぬ決意と未来への卓見によって決断されたものと考えられる。そして中国浄土教では例外的と思われるこのような解釈が主流となったことが、日本浄土教に「口称念仏」の扉を開かせたことができるだろう。そういった意味で善導による『觀經』のこのような解釈は、日本浄土教にとって決定的な意味をもつことになったということができる。

〈註〉

- 1 北魏、四七六―五四三年。五台山で出家。洛陽で菩提流支より観無量寿經の教えを受け、浄土教に帰す。著書に『浄土往生論註』二卷『讚阿彌陀佛偈』『略論安樂淨土義』等がある。
- 2 五六二―六四五年。涅槃經に通じていた。四十歳の時、曇鸞の碑文を見て、浄土教を修した。著書に『安樂集』二卷。
- 3 兜率天の内院にあって衆生を教化し、釈迦牟尼仏の入滅後に娑婆に下生して説法する未来仏。
- 4 西方の阿弥陀仏に対する東方の現在仏。
- 5 東方浄瑠璃世界の教主。衆生の病源を救い無明の病を治すとされた仏。日本では奈良朝以来信仰され、その造像の数も多く葉壺を持った像が多い。
- 6 阿弥陀如来の修行時代の名。
- 7 前七世紀頃、イランで成立した宗教。中国へは南北朝時代に伝わり、唐代には祇教と呼ばれた。
- 8 中央アジアのイラン系遊牧民サカ族及びカスピ海南東にいたイラン系遊牧民パルティア族が西北インドへ侵入した時代。
- 9 一―三世紀大月氏の支配下にあったクシャーナ族が自立して西トルキスタンから西北インドに建てた王朝。二世紀のカニシカ王時代に全盛期を迎えた。
- 10 パキスタン北部に、紀元前六世紀から紀元後五世紀にかけて栄えた古代都市。古代においてこの地は、ガンジス川流域から中央アジアへかけての幹線路とインダス川を下ってアラビア海沿岸に通じる水路の交差点に当たり、交通の中心地であった。前世紀にはマウリア王朝の西北辺境の要塞とされ、クシャーン王朝時代には交易の要地であり仏教の中心地としても栄えた。
- 11 二卷。大経ともいう。曹魏の康僧鎧訳。「浄土三部經」の一つ。四十八願を成就した阿弥陀仏の因行・果徳と衆生が念仏して極樂に往生することを得る因果を説いた経典。
- 12 一卷。小経ともいう。四〇二年、鳩摩羅什訳。「浄土三部經」の一つ。仏が極樂の依正の莊嚴を説き、六万の諸仏が証誠し念仏の衆生を護念することを

説いた教典。

- 13 一卷。四四二年、璽良耶舍訳。「浄土三部経」の一つ。阿闍世王の悪道に悲嘆した母、韋提希夫人の為に仏が神通力で十方の浄土を示し、夫人が極楽浄土を選んだことに依って阿弥陀仏とその浄土の莊嚴を説いた教典。

- 14 一二〇巻。七二三年、唐の菩提流志訳。四九の独立の經典類の集大成で、〈宝積部〉と呼ばれる大藏經中の一部門の根幹となっている經典。

- 15 四世紀末の人。父はインド人鳩摩羅炎、母はクチャ国の王妹。大小乗に通達していたが、故国で大乘を広めた。四〇一年、長安に入り『摩訶般若波羅蜜經』『妙法蓮華經』『阿彌陀經』『中論』『大智度論』など所謂、玄奘以前の旧訳の重要な位置を占める經典類を訳出した。四一三年、長安で寂す。

- 16 欲界六天のうちの第四天。釈尊もかつてここで修行し、弥勒菩薩は現にここで説法している。

- 17 古代インドの宇宙論で世界の中心にあるという山。須弥はSumeruの音写。『俱舍論』に詳説されている。

- 18 大乘仏教の基盤を築いた思想家で、中観派の祖。以後の仏教は総てその影響下にあるといっても過言ではない。日本では南都六宗天台、真言を合わせ八宗の祖となされる。南インドのバラモンの出身。四ヴェーダを学び、小乗仏教、大乘仏教を学んだ。『大智度論』『十住毘婆沙論』など多数。

- 19 四〇〇―四八〇年。天親ともいう。唯識派の論師で大成者。ガンダーラ地方の Purusapura のバラモンの出身。『阿毘達磨俱舍論』他多数。世親は当初、部派仏教に属し一切有部の立場に立ち、後に経量部的な考えを容れ、次第に大乘仏教へと転向。

- 20 『無量壽經』大正新脩大藏經第十二 大正新脩大藏經刊行会 大蔵出版 一九二四年 二六八頁 a、b

- 21 『觀無量壽經』大正新脩大藏經第十二 大正新脩大藏經刊行会 大蔵出版 一九二四年 三四三頁 a

- 22 『觀無量壽經』大正新脩大藏經第十二 大正新脩大藏經刊行会 大蔵出版 一九二四年 三四三頁 b

- 23 唐代の浄土教の僧、六一三―六八一年。浄土五祖の第三祖。後に道綽をたずね曇鸞・道綽と相伝する浄土教を継いだ。

- 24 七世紀、唐代初期の浄土教の僧。長安の弘法寺に住し『浄土論』三巻を著す。七世紀、唐代の浄土教の僧。善導の弟子。善導に浄土教に対する疑問を糺し、ひたすら念仏を修した。『釋浄土群疑論』七巻等。

- 26 『大方廣佛華嚴經』六〇巻。仏駄陀跋羅(三五九―四二九)訳。華嚴經と名づけられているものは三本であるが、漢訳ではこの三本のうち「六十華嚴」と「八十華嚴」が完本である。チベット訳では「八十華嚴」と類似している完本がある。サンスクリットの完本はまだ発見されていない。各章が独立して成立し、四世紀頃中央アジアでそれらが集大成された。釈尊が迷いを払い成道した悟りの世界を表現した經典。

- 27 『大般涅槃經』の略。釈尊の入涅槃、並びにその際説かれた説法を記した經典。四〇巻。北涼の曇無讖訳。

- 28 サンスクリット本は散逸して伝なし。漢訳は七本あったが、現存は四本。三巻本は支婁迦讖訳。紀元前後から一世紀頃にかけて編纂されたものである。三巻本に「若沙門白衣所聞西方阿彌陀佛刹當念彼方佛不得缺戒一心念若一晝夜若七日七夜過七日以後見阿彌陀佛於覺不見於夢中見之」とある。この經典は浄土經典の先驅として注目すべき内容をもっている。『般舟三昧經』大正新脩大藏經第十三 大正新脩大藏經刊行会 大蔵出版 一九二四年 九〇五頁 a)

- 29 一〇〇巻。龍樹著。サンスクリット本、チベット本は現存しない。羅什が四〇七年に漢訳した。羅什の改変に依り現存本が必ずしも総て龍樹の作とは言えない。内容は広汎に涉っており、当時の仏教百科全書と呼ぶにふさわしい。龍樹以前の仏教学説が知れると同時に、大小乗の相互交流と思想の発達を知ることができるといふ意味においても、また龍樹の思想を知る意味でも極めて重要な典籍である。

- 30 総持、能持、能遮と訳す。よく総ての物事を摂めもって忘れない念慧の力という。諸經論には菩薩の得る陀羅尼に関して説く所が極めて多い。後世では

この記憶術としての陀羅尼の形式が誦呪に類するため呪と混同されて、呪を総て陀羅尼と呼ぶようになった。ただし、普通には長句のものを陀羅尼、数句から成るものを真言、一字二字から成るものを種子という。

31 月支国の入、二世紀頃。後漢の一四七年、洛陽に来て一八六年までに『般舟三昧經』『首楞嚴經』等を訳す。

32 東晋の人、三三四―四一六年。廬山の「白蓮社」の祖。二十一歳の時、釈道安の門に入る。後に廬山へ行き、東林精舎を建てて住し白蓮社を創して念仏を修す。八十三歳で没す。『大乘大義章』など。

33 三国時代の訳経者、三世紀頃。インド人という伝あり。二五二年、洛陽に来て白馬寺で『郁伽長者所問經』一卷、『無量壽經』二巻を訳したと伝える。

34 美作国の人、一一三三―一二二二年。日本浄土教の祖。吉水大師、吉水聖人、黒谷聖人とも称する。一一四一年、父の遺言により叔父觀覺について出家。十三歳で叡山西塔北谷の源光の室に入る。一一五〇年隱遁を決意し西塔黒谷の叡空をたずね、法然房と号して黒谷に籠居。その後、南都の仏教学を修す。一一七五年、善導の『觀經疏』によって専修念仏に帰し叡山を下る。

広く貴族、武士、一般庶民の帰依を受ける。門弟に幸西、聖覺、隆覺、弁長、証空、親鸞等がいる。一二〇七年、専修念仏が禁止され讃岐に配流。『選擇本願念佛集』『無量壽經釋』一卷、『觀無量壽經釋』一卷、『阿彌陀經釋』一卷など。伝記絵詞類も多い。

註28参照。

36 荊州の人、五三八―五九七年。天台宗の祖。五六〇年、『法華經藥王品』によって開悟。その後、玉泉寺を開き『法華玄義』『摩訶止觀』を講じる。その経説は教義と実践の二面を兼ね備え、中国仏教史上、一つの頂点に達したといわれる。

37 智顗の『摩訶止觀』卷二に説く四種の三昧。心を一つの対象に専念して正しく智慧を得るための実践（止観行）を四種に分けたもの。常坐、常行、半行半坐、非行非坐。常行三昧は『般舟三昧經』の説に基づき、九十日間道場内の仏像の回りを歩き巡って阿弥陀仏の名を念じ称えるもの。

〈主要参考文献〉

- ・『佛教辞典』宇井伯壽監修 大東出版社 昭和五十五年
- ・『仏典解題事典』水野広元他責任編集 春秋社 一九八〇年
- ・『無量壽經』大正新脩大藏經第十二 大正新脩大藏經刊行会 大蔵出版 一九二四年
- ・『觀無量壽經』大正新脩大藏經第十二 大正新脩大藏經刊行会 大蔵出版 一九二四年
- ・『阿彌陀經』大正新脩大藏經第十二 大正新脩大藏經刊行会 大蔵出版 一九二四年
- ・『般舟三昧經』大正新脩大藏經第十三 大正新脩大藏經刊行会 大蔵出版 一九二四年
- ・『総合佛教大辞典 上下』総合佛教大辞典編集委員会 法蔵館 一九八七年
- ・『日本仏教全集叢書資料総覧』小山田和夫他編 本の友社 一九八六年
- ・『講座大乘仏教 浄土思想』平川彰他編 春秋社 一九九六年
- ・『原始浄土思想の研究』藤田宏達著 岩波書店 一九七〇年
- ・『浄土教の展開』石田瑞磨 春秋社 一九七七年
- ・『仏教の思想8』塚本善隆他著 角川書店 昭和四十三年
- ・『日本佛教史』田村圓澄著 法蔵館 一九八二年
- ・『東洋仏教人名事典』斎藤昭俊他編 新人物往来社 一九八九年

(そ くだ けいこ 文化創造学科)